岩手県沢内村立沢内病院歯科
岩手県盛岡市県立中央病院歯科口腔外科*

沢内村では，昭和52年度より35～59才を対象として総合成人病検診を行っており，その一貫として歯科部門では，検診，パノラマX線撮影，衛生教育，希望者に対する歯石除去を行っている。今回，我々はその活動の概要と過去6年間の40才台の口腔状況について調査したので，その結果を報告した。1人平均う歯数（D＋F）は，男性 5.8本，女性 9.0本で，女性が高い値を示した。1人平均現在歯数は，男性24.9本，女性19.9本で，男性が高い値を示した。健全歯数，処置歯数，未処置歯数は，男性で，それぞれ19本，2.6本，3.3本，女性は，11.0本，　6.0本，　3.0本の割合で，女性における処置歯数が，特に高い値を示した。1人平均喪失歯数は，男性 4.6本，女性 8.6本で，女性が高い値を示した。喪失歯所有者率も同様に女性が高い値を示した。喪失歯所有者の補綴状況は完3者，一部完3者，未3者の割合が，男性ではそれぞれ30.4%，31.7%，37.8%，女性では39.9%，41.0%，19.3%で，完3者，一部完3者は女性に多く，未3者は男性に多い。1人平均根尖部病変歯数では，男性0.58本，女性1.04本で女性が多い。1歯あたり歯槽骨吸収程度は，男性1.63度，女性1.71度であった。今回の調査では，女性における早期喪失，男性における補綴状況の低さが，目についた。又，過去6年間を通して，女性の補綴状況にやや改善が認められたものの，その他の口腔内状態は，特に改善されておらず，成人における歯科治療，予防の困難さを痛感した。しかしながら，この成人病検診の中での歯科活動を通じて，住民の口腔衛生に対する関心，意識は，高まってきており，統計的には短期間に改善されるとは思われないが，将来においては，この活動が歯科疾患の早期発見，早期治療に結びつくものと思われる。我々は，今後も，長期的展望に立ち，現在の成人歯科予防活動を継続し，検討していきながら，成人歯科治療，及び予防に，積極的に取り組んでいきたいと思う。

演題8．衣川村における学童齲蝕罹患についての比較検討

○佐々木 勝 忠，桜 庭　敬 子

岩手県衣川村国保診療所歯科

岩手県衣川村は，昭和49年より衣川村国保診療所に歯科の設置をみたが，それ以前は無歯科医村であり，学童の口腔状態が悪いため，昭和47年より昭和54年まで東北大学歯学部予防歯科学教室による「無歯科医地区学童を対象とした保健計画」が実施された。その概要は口腔衛生学会雑誌第28巻第2号に高木氏らの論文として記載されている。

今回，私達は最近の齲蝕予防活動の評価を目的に，昭和56，57，58年の衣川村学童の歯科検診結果と，歯痛経験調査結果について，高木氏の論文資料と比較検討した。

結果，衣川村学童の口腔状態を昭和47，52，58年と経年的に比較すれば，全学年のDMF者率は，89.9%、79.0%，57.5%と減少を示し，とくに低学年での減少が著明であった。DMFT指数は，3.55，2.99，1.52と同様に減少を示した。D歯率は，85.9%，41.5%，25.0%，M歯率，　5.5%，　1.9%，　0.7%と減少し，逆にF歯率は，　8.7%，56.8%，74.8%と著しく増加した。

昭和47年の衣川村学童の口腔状態は，厚生省歯科疾患実態調査による昭和50，56年の全国平均のDMF者率，DMFT指数を大きく上まわっていたものの，昭和58年では全国平均より低下を示していた。

歯痛経験のアンケート調査では，今痛む歯がある，今は痛くないがときどき痛むと答えたものの割合が，昭和47年43.0%から52年22.8%と減少したものの，58年では19.9%とあまり減少を示さなかった。昭和58年の歯痛を訴える学年別割合では低学年の割合が多きかった。また学校で歯痛を訴えたり，歯痛のために学校を休んだ経験をもつものの割合は，昭和47年より経年的に減少したが，昭和58年では増加を示した。

結論考察，多方面からの齲蝕予防のアプローチにより本村学童の齲蝕は著しい減少をみた。しかしながら齲蝕減少にもかかわらず，歯痛を訴えるものの減少が伴なわない。歯痛は乳歯に起因すると考えられる。今後，低年齢児の齲蝕予防に努力する必要を感じた。

演題9．小児歯科外来の初診患者における実態調査

○小 野　玲 子，八重畑 雅 子，野 坂 久美子
甘 利　英 一

岩手医科大学歯学部小児歯科学講座

この数年，小児歯科外来を訪れる患児は，色々な点で

大きく変貌してきているように思われる。そこで，最近の小児初診患者61名についてアンケートを中心に，口腔内所見，全身状態，さらに家族構成など患児を取りまく環境について調査を行なったので報告する。

患児の初診時年齢は3才が最も多く，平均は3Y5Mで，非常に低年齢化しているように思われた。主訴はう蝕処置が最も多く，う蝕罹患者率は96.7%，1人平均う蝕歯数は8.7本であった。また，う蝕罹患型は下顎前歯部を除いたB型，あるいは全歯牙の罹患を示すC型が多く，低年齢児のう蝕の重症化が認められた。また，治療経験がなく直接本学に来院する人が増えてきているが，これは保護者が専門医を選ぶ傾向になってきたものと思われる。歯の点検では，半数以上が毎日行っているものの，う蝕の増加と考え合わせると，点検の内容に問題があるように思われる。一方，全身状態について，今まで大きな病気にかかったことのある者は8.2%，アレルギーのある者は18.0%もおり，一見健常児と思われる子供でも，何らかの異常を持っている者が多くなってきていた。家庭環境では，平均家族数が4.4人，子供の数が平均2.0人で，半数以上の患児は第一子である。日中，主に養育するのは母親，ついで祖母であるが，病院に連れて来るのは母親がさらに多くなっている。来院にはバス，車などの交通手段を用いている者がほとんどで，平均通院時間は40分であった。地域別には，市外から来ている者が半数近くあった。しつけの面では，主に母親が叱り，母親中心の生活が伺われる。このような点から，母親の小児への影響の大きさが伺え，その結果，時には片寄った愛情過多が見られ，小児の歯科治療時における取り扱いの困難さを一層増加させてきている。このような点から，歯科治療そのもの以前に，歯科医と保護者，患児，そして医療従事者の信頼関係が必須と思われた。

演題10. 岩手県立中央病院歯科口腔外科における入院患者及び手術症例の臨床統計的観察（第一報）

○千葉　寛子，新津　二郎，中里　滋樹
小川　邦明*

岩手県盛岡市県立中央病院歯科口腔外科
岩手県都南村小川歯科医院*

今回我々は，昭和50年9月から，昭和58年8月までの過去8年間の岩手県立中央病院歯科口腔外科における入院患者及び手術症例の統計的観察を行ったのでその概要を報告した。口腔外科的観血処置を受けた患者は，入院170例，外来202例　計372例で総新患数7468名の5%であった。入院患者の非観血処置は62例で手術施行率は73.3%であった。年度別には入院症例は昭和52年が最も多く39例で昭和58年は8月31日現在で24例であり，外来症例は昭和54年が35例，昭和58年は28例であった。年齢別にみると，入院患者は20代，30代，40代が多い傾向を示しほとんど差はみられず，外来患者は20代が最も多く次いで30代以下50代，40代となっていた。月別手術症例では，入院症例は季節的変動はなく，外来症例は，4月11日が多く，9月，12月が少い傾向にあった。入院患者の地域別分布は盛岡市が74名で228名中32.5%，次に久慈市14名であった。来院経路は院内から36名，院外から89名で54.8%が紹介患者であった。入院日数は殆んどが2週間以内であったが，長期入院は悪性腫瘍患者においてみられた。疾患別手術症例は，入院外来あわせて最も多いのは嚢胞30.2%，次に歯の異常23.1%，そして炎症12.2%の順であった。入院患者の非観血的処置62例のうち最も多いのが炎症で非特異性炎34例で，特異性炎は放線菌症の1例であった。手術内容をみると，嚢胞は111例中最も多いのが術後性頬部嚢胞18例，処置は嚢胞摘出術62例，軟組織においてはクライオサージェリーが外来症例で多くみられた。炎症は45例で処置は抜歯と掻爬を兼ねた処置が22例で炎症の48.9%を占めていた。歯の異常は85例で処置は智歯抜歯が61例71.8%であった。奇形は13例，外傷は11例で，処置は観血的整復術が6例行われていた。良性腫瘍は41例で処置は腫瘍摘出術32例であった。悪性腫瘍は17例で同一患者における重複手術例が行われている場合もあり，処置は切除術やカニュレーションなどであった。

演題11. X線写真における歯槽骨の評価について

○加藤　恵美子，高谷　直伸，奥山　千佳子
川守田　奈美，増田　由紀子，遊佐　奈保子
上野　和之

岩手医科大学歯学部歯科保存学第二講座

歯周疾患の診査のうちで，骨吸収状態の判定は，一般的には，X線写真によって行われていることが多い。通常は等長法のX線写真による四段階評価，或いは十段階評価によるが，等長法の撮影では，上顎臼歯